

[第136回]

信じる道を歩み続けて

小山 実雅恵 (ピアニスト)



©ND CHOW

◆昨年は12年間にわたる大きなプロジェクトの達成とともに、紫綬褒章も受章され、充実の円熟期を迎えた今の心境、そしてこの先に見据えている目標や取り組みはありますか？

12年間のリサイタル・シリーズは、私にとっての「12年間のピアノの旅」でした。たとえば、地球をぐるっと一周して終着点が出発点に戻るように、再び新しい気持ちで始発点に戻ってきた、そんな感覚を持っています。12年間の中には、思いもかけないことも起こりました。「東日本大震災」では、生きてゆくなかで「音楽」とは何なのだろう、「音楽の力」で一体何ができるのだろうと考えさせられました。自分の心に正直に生きながら、さらに深く音楽を見つめながら歩みを続けなければと強く感じています。

音楽は点数で評価できるものではありません。上手い下手があったとして、真の正解もなければ不正解もない。なにかに響くものがあることが大切なのです。ピアノに魂をこめて、信じる道を歩んではいるものの、どうやったら自分の感じている音楽を表現できるのだろうと、日々手探りで音楽と向き合っています。ですので、紫綬褒章をいただいたことは、大きな励みになりました。章に恥じないよう、さらに深く音楽を見つめ、演奏し続けなければと思っています。

2019年から「ベートーヴェン、そして…」という3年間で全6回のリサイタル・シリーズを行います。ベートーヴェンの信念を持った生き方や、曲の持つ永遠の気高さに向き合っていくと思っています。

◆盛岡市民文化ホールのためにピアノを選定していただき、ピアノ開きの開館記念リサイタル開催から20年、その間の盛岡での演奏などを振り返って、どんなことが思い起こされますか？

盛岡はふるさとであり、戻ってくる度に、心が和みます。ピアノを始めたのも盛岡です。

盛岡での演奏会で友人や知人たちに会える喜びは大きく、私にとってやはり特別な地なのだなあと感じます。中学2年までの盛岡での生活が無ければ、私は、もしかしてピアノを弾いていなかったのではなかったか、と思うことさえあります。

◆今回のプログラムについて、選曲に込めた想いをお聞かせください。

シューベルトは私にとって特別な作曲家です。曲から感じられる優しさ、それは心の壁に染み入るような慎ましさです。あまりの美しさ優しさに、演奏していると心が震えてきます。そして、空気が一変するようなバッハ=ブゾーニの「シャコンヌ」。もともとバッハの「シャコンヌ」はヴァイオリンの作品ですが、ブゾーニによってピアノ曲に編曲されました。大変ピアニスティックな作品で、厚みのある響きは大聖堂のステンドグラスから差し込む光を思わせます。後半はピアノの詩人、ショパンの作品から。「ノクターン」「ラルゲット」、そして晩年の名作「子守歌」「舟歌」を演奏します。プログラム最後はラフマニノフのピアノソナタ第2番です。ロシア的な暗い起伏と、乱れ散る音の粒。ロマンティックな甘美さと随所に出現するロシアの“鐘”の音を感じていただけたら嬉しいです。

◆幼少期に盛岡でピアノに出会い、夢中になって、音楽の世界に大きく羽ばたかれました。ふるさと盛岡への想い、そして次代に伝えたいメッセージをお願いします。

盛岡の自然の中でびのびとピアノを続けていられたこと、都会のように誘惑が多くはない環境で、好きなピアノに集中しながら過ごすことができたことは、私の人生の最高の幸運だったと思っています。

現代は情報が溢れ、子供でもとても忙しい。先の見えない不安もあり、安定志向の時代であるような気がします。「好きなものを見つめて、心に正直に生きてゆこう」と思うことは勇気のいることかもしれません。しかし、「好き」という強い気持ちがあれば、どんな困難も乗り越えられるはず。恐れずに自分が感じたもの、心が向くものを大切にしながら生きていってほしい、そうありたいと思い、また次世代を担う子供たちにもそうあってほしいと思います。

■公演情報

盛岡市民文化ホール・大ホールで9月15日(土)に「小山実雅恵 ピアノリサイタル」を開催します。詳細は盛岡市民文化ホールの情報コーナーをご覧ください。

編集「月刊げっと」編集部

〒020-0045 盛岡市盛岡駅西通 2-9-1マリオス5F
公益財団法人盛岡市文化振興事業団
TEL019-621-5151 FAX019-621-5101
http://www.mfca.jp/